

# 周作クラブ会報

(第55号)  
2014年6月11日発行

周作クラブ

## ◆主な記事◆

- 遠藤文学「原貞の旅」(2・3面)
- 『侍』展報告 (6・7面)
- 井上洋治神父の  
帰天に寄せて (8・9面)
- 「原稿発掘」 (10面)
- 文学セミナー (12面)

## 新展示 「遠藤周作と歴史小説

### 『沈黙』から『王の挽歌』まで

## 第8回企画展リニューアルオープン

長崎市遠藤周作文学館では、2014年5月24日(土)より、第8回企画展「遠藤周作と歴史小説——『沈黙』から『王の挽歌』まで」を開催しております。当館では2年ごとに展示内容を替えており、本企画展は2016年5月まで行う予定です。今回は歴史小説の中から九州を舞台にした作品を主に扱い、日本とキリスト教をめぐる歴史ドラマをご紹介します。

### 企画展の内容

平成26年5月24日(土)より、長崎市遠藤周作文学館では第8回企画展として展示をリニューアルいたしました。

企画展のメインテーマは「遠藤周作と歴史小説——『沈黙』から『王の挽歌』まで」。

本展示では、九州を舞台にした『沈黙』『女の一生 一部・キクの場合』『宿敵』『王の挽歌』を中心に、神の問題をテーマにした一連の遠藤周作氏の歴史小説をご紹介します。

遠藤氏が歴史に材をとった作品のジャンルは、純文学、評伝、ユーモア小説と多岐にわたります。とくに、晩年は戦国時代を舞台にした作品が多く書かれました。

今回の展示は二部に分かれ、第一部(第1展示室)「歴史小説の世界」では、それらの作品から特に九州のキリスト

教の歴史に関わるものを扱い、日本人とキリスト教というテーマを生涯の宿題とした作家の歴史への眼差しを追います。

「日本人でありながら、イエスと関わったこと。それだけで彼等は私の親なのである。同胞なのである。」

これは『走馬燈—その人たちの人生』(毎日新聞社)で遠藤氏が切支丹時代を生き抜いた日本人たちに想いを寄せた一節です。

今回取りあげた作品のなかで、『宿敵』『王の挽歌』の主人公である、小西行長と大友宗麟は、日本の切支丹史上において重要な人物であり、また遠藤氏が自分に繋がる人物として特に関心をもった「同胞」と言えるでしょう。

この二作品を、今回はじめてテーマの柱として扱うことで、改めて一連の歴史小説の根底に流れる信仰のテーマを観覧される皆さまに感じとっていただけたらと思います。展示資料としては、原稿・草稿のほか、小西行長の評伝を構想した時のノート、『王の挽歌』執筆当時に使用した手帳など、小説の創作に関連する直筆資料を展示しています。

第二部(第II展示室)「歴史を訪ねて」では、創作の重要な過程である取材旅行に焦点をあて、遠藤氏が足を運んだゆかりの地をパネルで展示しています。また、人知れず残された旧跡を訪ねるのが好きだった遠藤氏の山城めぐりや旅行など、遊びの側面も紹介しています。

歴史を心と肌で感じ、楽しむことを忘れない狐狸庵先生の歴史遊びの極意を、楽しんでいただけたらと思います。

来年(平成27年)、長崎は宗教史上の奇跡と言われる「信徒発見」(『女の一生 一部・キクの場合』参照)から150周年、原爆投下から70周年という大きな節目の年を迎えます。今回の企画展のテーマに含まれる、キリストをめぐる人間のドラマは、この二つの歴史に密接に繋がるものです。ここにかけて、遠藤文学が投げかけるメッセージが、より多くの方に受けとられ、現在に繋がる過去の歴史に目を向ける機会となれば幸いです。

### 関連イベント

企画展の関連イベントとして、5月24日(土)のオープニングセレモニーでは、「遠藤周作と歴史小説」と題して記念シンポジウムを開催しました。

6月28日(土)は、京都外国語大学の長濱琢磨先生を講師にお迎えして、「遠藤周作の歴史小説——歴史其儘」と「歴史離れ」というテーマで第26回文学講座を開催します。

7月19日(土)は、遠藤氏が小説の舞台である長崎と外海を訪ね、『沈黙』執筆の背景について語る『母なるもの—人間の同伴者』(プレジデント社)のビデオ上映会を開催します。イベントのお申し込み方法は「長崎文学館便り」の催し欄をご覧ください。

記・北村沙緒里  
(遠藤周作文学館専門研究員)



第8回企画展のポスター